

## 乳腺 画像と検査 序

本書の前身であるマンモグラフィ技術編の初版発刊から15年が過ぎ、改訂増補版の発刊からはちょうど10年が過ぎた。その間に乳腺診療を取り巻く環境は大きく様変わりした。

今回の改訂にあたり、医療科学社からは改訂増補版の増刷という依頼であったが、画像診断のみならず治療法も大きな変革を遂げたため、編者の責任上、現時点で最も新しく普遍性のある資料を目指し、新刊として発刊することにした。

初期のころ、マンモグラフィ技術編という書名を付けたが、これは別巻でマンモグラフィ臨床編を発刊することを前提として命名したものである。諸般の事情から臨床編を発刊することができなかったが、その過程でご協力頂いた執筆陣に今回も原稿執筆をお願いした。編集に際し、過去の資料を紐解くと、その時頂いた原稿が今も通用することに驚いた。これら資料は最新版を作成する際、執筆陣にとって参考になったと思う。本書は初期の頃目指した技術編と診療編をまとめて一冊にしたものである。

改定増補版の出版から10年でマンモグラフィ画像はアナログからデジタルに完全に移行し、さらにCRからFPDに、そして2Dから3Dへと移行しつつある。そのため今回はこの領域に精通した岐阜医療科学大学の篠原範充先生に技術的な面を、高崎総合医療センターの鯉淵幸生先生には運用面を執筆頂いた。また、変革目覚ましい乳腺診療面では二宮淳先生にご参加頂き、詳細な解説を頂くことができた。画像がどのように診療に生かされ、乳腺診療でどのような位置づけにあるかが良く理解できることと思う。これまで同様に日本を代表する方々に今回も参加頂けたことを改めて誇りに思う。

原稿執筆の依頼をする際、何人かの執筆者から、内容と頁数についての取り決めを教えてくださいと尋ねられた。その際、いつも読者の顔、表情を想像しながら、そして診療放射線技師の役に立ちたいという願いから、今書さうる最高のもを思い残すところなく執筆してくださいと自然にお願いしていた。集まった原稿を見るとどれもこれも素晴らしく、頁数を減らさなくて良かったと勝手ながら思った次第である。しかし、どんどん増える原稿、頁数に医療科学社は冷や冷やだったと思う。それでも温かく見守って編集を進めて下さった本書担当の齋藤聖之氏に感謝する。

初版発刊の時から本書のテーマは、一冊にまとまっていて必要な時にいつでも役に立つこと、読者の皆様にとって見やすく使いやすいこと、本邦の乳腺診療に寄与すること、そして普遍性の価値を持たせることとしている。今回も素晴らしい執筆陣にご協力頂き、その目標が達成できたと思う。

本書を作成するにあたり、これまで乳腺検査の指導的立場にあった大切な診療放射線技師お二人を喪ってしまった。寺田央氏には初版から執筆にご協力頂き、また講習会等でも終始ご指導いただいた。中島直氏には本書を執筆する際にご協力頂きたかった。両氏にご指導いただいた知識を大切にしながら本書を作成させて頂いた。計画から完成まで2年近くかかってしまったが、やっと本書の完成を報告できることに安堵している。両氏のこれまでのご指導に心より感謝し、安らかに永遠の眠りにつかれる事をお祈りいたします。

2019年8月吉日

株式会社メディカルクリエート 石栗一男